



リステラス星圏史略
古資料ファイル
3 - 3 - 2 - 1



「清瀬律子の物語」

(発掘作業中)

霧樹里守 is 土岐真扉

リッコヘ。

理事長に就任したとの報、聞きました。まずはおめでとう。大人しかったきみが、そういった組織に携さわることになっていたとは少なからぬ驚きだったけれど、たしかに僕はきみを覚えていました。よく気にいった本を貸してくれたりしてましたよねー給食の時間いっしょに食べましたよね。

もう大昔のことです。

きみが、キヨセ律子が、(ごめんなさい字を忘れました)、そちらの、代表としてこの大地世界を訪れたいと言っていると、マーシャ.....旧名、有澄真里砂.....から聞かされた時には、僕は、まだ小学生だったあのきみにもう一度会えるものだと一瞬なつかしく、それから、地球という世界における50年という歳月の意味を思い出して、おばさん(失礼!)になったきみを想像するのに苦労をしていました。ところが門を抜けて姿をあらわしたのは、ぼくの記憶にあるままの、頭に白いリボンをつけた女の子だったわけです。

(※>p.2.) きみの、息子さんの、お嬢さん.....孫、ですね、つまり.....タカハラのほうの律子、責任を持ってお預かりします。僕自身にかえても次の月踊の蝕には再び門の前へお返ししますので、安心して下さい。.....もっとも、この手紙はその高原律子ちゃんへ託すわけですから、このノートが手元へ届いた時には、僕の言葉は実証されているわけですが。

それにしても、ほんとうにきみにそっくりです。僕自身がまだ少年と言って通る外見でいるうちに、かつての幼なじみに、僕の妹で通るまうなのようなとしの、孫がいるとは!!

.....かつて決裂の3マグチュアリ(大歴または上歴とでも訳せばいいでしょうか、1マグチュアリは約4000年にあたります。)の昔以来、相似た文化と文明を持っていたはずのダレムアス(大いなる母神ダーレム=大地、の世界ウアス)と地球(ティカーセル)(ころがる世界ティクス・ウワセル)が何故ここまで違ってしまったか。結論はここにつきるような気がします。

神を喪った地球の人類は、世代交代が早い!!

現代医学、なる術のすべてをつくしても僕がいたころの平均寿命の公称は男女とも80歳前後だったと思います。先進国の日本で、です。一方ダレムアスでは病気や事故で(ご存知の通りこれに近年は"戦争"が加わりますが)でなく200歳を迎える前に死

ぬ者というのは、ごく稀なのではないでしょうか。"統計" だの "戸籍調査" だのは、そもそも概念からしてありませんから正確かつ科学的なことは何も言えないのですが。つけ加えるならマルクウス（王族、つまりダレムアスにおける創世主、女神マリアンディアの子孫）の直系であるマーシャなどは、前例からして400年前後はかるく生きるのではないのでしょうか？

なにはともあれ、タカハラのほうの律子、責任をもってお預かりします。僕自身にかえても次の月踊の蝕には再び門の前へお返ししますので、安心して下さい……もっともこの手紙はその高原律子ちゃんへ託すわけですから、手元へ届いた時には僕の言葉は実証されているわけですが。

今日は見張り番の時間ですので、このへんで。

第二日、

孫のほうの律子嬢はよく眠れたようです。"リツコ" という音はダレムアスの言語体系にはなじみにくいもので、早速に愛称がつきました。"リーツ"。平野にいる小動物です。このあたりでは見られないようなので絵に描いて説明したところ、本人も気に入ってくれた様で、ふだん、口語で呼ぶときにはこれに接頭的美辞がついて"マリーツ" になります。

それにしても、そちらから律子=マリーツに託された"さし入れ"がこのノートと筆記用具だった、という事実！……あいかわらずの洞察力ですね。朝日ヶ森は。たしかにダレムアスには、紙の製法は知られていないわけではないのですが、あまり流布していません。街道をゆく隊商や一部の商人は和紙と不織布のあいこのようなものを帳簿として使っていますが、一般のダレムアトは"樹が泣く"と言って、そのような加工法を好みません。昔の日本画のように絹布をその都度洗いなおして使うか、木簡、石板、あるいは交易路ぞいではイムエレ樹の広葉。ダレムアスにおける文盲率はいたって低いのですが、おおむね、"すぐに消すものなら書く必要はない"式の、口頭伝達の方が好まれます。優れた記憶力であるからこそでしょう。

で、話は戻りますが、朝日ヶ森の洞察力と親切が、しっかり下心に裏打ちされたものであることも忘れていませんでしたよ、僕らは。どうせこちらに"物書きぐせ"があるの見込しての（ずい分長いあいだ忘れてましたが！）ことでしょう。それに、こちらの国内で広く保存・利用するには、シャーペン、消ゴム、安価な紙、という三種

の神器は、文明のレベルも文化の質も違いすぎるものですし。

暗黙裡の御要望通り情報入力の後、そちらの世界へお返し致します。

三者協議の結果、マーシャはダレムアスの代表たる女王の公文書として、ダレムアスの歴史（神話と）のあらましと現在の地誌、情勢、それらを含んだ対地球との関係をどうありたいと望んでいるか.....を、雄輝は将軍メイデリオの資格でもっぱら現在の対"地球・ボルドム連合軍"戦争の経緯を、そして僕は、あくまでも在地の地球大と七で僕ら3人自身のこと、こちらでの文化・生活など気づいた事をルポとして片はしから補足する.....という分担が決まりました。

まあ実際には、身辺雑記を兼ね、私信を兼ねているのは御覧の通りです。

なにしろ日本語で長文など書くのは数十年ぶり（たいていは3人で話す時にでもダレムアナロクです.....地球の言語類は、まあ"暗号"ですね）、間違いがいっぱいあると思います。

あと、残りのノートは3人協同で、ダレムアナロク<>日、英、の、簡易文法書と主要語辞書をあむことになるでしょう。出来上がりがいつになるかは判りませんが。

.....さて。

まだ小学校高学年～中学2年までの間に、漫画家になることを目指して書き溜めていたイメージイラストや絵コンテもどきがかなり残っているのですが、それはまた、スキャナの使い方をマスターした頃に、改めて.....（笑）。

予定通り、沈没原稿のサルページあんど虫干しの、「大地世界編」は、これにて終了です。

明日からは、「地球世界の日当たり編（プラスアルファ付き）」行きます♪

(^_^)☆

『 序章 ・ すべての始まり 』 (@書いたのは中学～高校...着想は小学校3～4年!! ☆)

[『 序章 ・ すべての始まり 』 \(@書いたのは中学～高校.....だと思いが.....着想自体は小学校3～4年!! ☆\)](#)

2006年10月20日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

× × ×

雨だった。窓際に席をもらっているリツコは、さっきから外の景色ばかりを見るときもなしに眺めていた。

とりどりのアジサイの花にぐるりを囲まれた校庭。その、校舎とは反対側にある正門のむこうから、おりしも一台の車が入って来るところだった。

((あ、))

リツコはその車を見つけた時、何か世界が一回転してしまうような不安定な気分になった。連日の雨でこれだけぬかるんでいるのだ、本当なら自動車のタイヤのあとがはっきり残るはずだ。と、言ってもリツコがこの時それに気がついたというわけではなかった。リツコがくらりと来て思わず机にひじを突いてしまったのは——その、わりに大型の自動車の、本当に奇妙な色合いのせいだった。

いつも大人しく座っているだけのリツコが不意に動いたので、隣の席の男の子がどうしたの？という顔でこっちを見る。((あのね、))リツコは手真似で窓の外を見るように云おうとした。

「清峰クン。」 先生の声がする。

「はい。」 隣の子は、別にあわてるでもなく行儀良く立ちあがる。

この間 書いた 工場見学の感想文を順ぐりに返してもらっているところなのだ。

「あなたには漢字や言葉使いのマチガイもないし、字も丁寧で、構成もしっかりしてる。細かいところまでよく調べてあるし、加工行程の合理化案なんてのも考えてあって、先生とても興味深く読ませてもらいました。

ただ、ねえ、先生は感想文って云ったでしょう。前に出してもらった読書感想文の時もそうだったけど、清峰クンの書いてくるのは感想文で云わないの。レポートなのね。.....どうして、面白かった、とか疲れた、だけでもいいから、自分で感じたことを書かないのかな？」

「あの——すみません。でも.....」

男の子が困ったように云いはじめる頃、リツコは例の車の様子が変わったのに気がついていた。ゆっくり走ってそろそろ校舎にたどりつこうかという頃になって、ちょっとかしいだかと思うと止まってしまったのだ。

いや、ちゃんと止まったわけではないようだった。タイヤは回っているし、慌てたように揺れたりかしいだりしている。——よく見ると、その自動車は空中に浮き上がってしまっているみたいだ。

「僕は——」 清峰くんがなおも言いよどんでいると、突然、

ガラッ!!

——激しいいきおいで教室のドアが開いた。

「早く！ 急ぐんだ!!」

黒板のすぐわきで叫んだぼうっと黒っぽい人影は、ドアからかけこんで来たというよりは その場に湧いて出たようにリツコには見えた。

机の列を飛びこえるような勢おいで、2-3歩で教室を横切って来る。

「え、……」

まだ立ったままだった清峰くんは、いきなり腕をつかまれてキョトンとした声をだした。

「あの、……どなたですか？」

「急ぐんだったら!!」

影はひどく切迫している様子だった。

「説明しているヒマはない。今すぐわたしと来るんだ。早く！ もう時間がない。奴らを抑えておけるのはあと少しだ。」

「……あの。ええと——」

迫力負け、というよりは“影”の必死な表情に圧されて少年はもう少しでハイと云いそうになった。と、

「——アノ！ 困ります！」 ようやく気をとりなおした先生がわりこんだ。

「誰ですかあなたは！ どっから入って来たんです?! 今は授業中ですよ。あたしの生徒に手を出さないで下さい!!」

聞きなれた早口に生徒たちも一斉にさわぎはじめる。

「あんただれ!？」

「清峰くんどうしようっていうのよ」

「出てけよ——!!」

騒動が頂点にたっし、そろそろ隣近所のクラスからも廊下に出て様子をうかがうらしい音が聞こえ始めた。と、その時、

グ、ガッ!!—————

耳には何も聞こえなかったのに、みんな頭の中をなぐられたようなショックを感じて立ちすくんだ。それと同時になんだか教室内が暗くなったようなのだ。

天井のライトはまだついたままなのだったが、目に届く前に光と明るさが、どこか別のところへ流れだしていつてしまう感じだった。「寒い。」と誰かがつぶやき、普段から頭の良い子とか絵や音楽の得意な子、ユリ・ゲラーごっこにいつも成功する子などは本当に気持ち悪そうにして倒れてしまった。先生があわててそちらの方へすっとなでゆく。

けれど一番てひどいショックを受けたのは例の“影”のようだった。

“影”は妙な音がひびいた瞬間、はじき飛ばされたように机にぶつかって突嗟に少年の腕を放して

しまった。それから二言三言聞きとれないことを叫び——そして、がっくりと膝を折る。

「駄目だ——!! わたしの“力”ではとても足りない！」

ふと思いだしてリツコが窓の外を見ると、さきほどの不審な自動車がピロティの下に消えるところだった。

「——って云わないの、レポートなのね。……どうして——」

((えっ、))

リツコが振りむいた時には、そこはもうまったくいつも通りの授業風景だった。外の雨など知らぬげな明るい室内で、まじめに前を向いている子、熱心に内職をしている子。

「どうしたの？ 清峰クン。聞ってるの？」

生徒あいてにはめったに怒らない、朗らかで優しい先生の声——

「はっ、はい！ でも、あの……」

ガタンと立ち上がったハズミに椅子を蹴倒しそうになり、リツコが突嗟に手を伸ばしてそれをささえた。一瞬、2人の子供の眼が合う。

——きみ、見たんだね——少年の淡い色の瞳が少女に語りかける。

((ええ、)) リツコは首をタテに振った。今日ばかりは赤くなっているヒマもなかった。

と、4時限目の終りをつげるチャイムの音がする。

「あら、もう？ ……今日はやけに早いわね」

先生が腕時計と黒板の上の壁時計を見くらべながら云う。

「起立！」

先生が云い、

「礼!!」

学級委員が云う。

雑然となりかけた教室にドアをノックする音が響き、リツコたちはギクツとして班態形に直そうとしていた机をひっくりかえしてしまった。

「清峰クン。」

用務員のおじさんから用件を聞いていた先生が振りかえって、呼んだ。

「お客さまがおみえだそうよ。先生といっしょにちょっと来てちょうだい。」

倒れた机を直そうと身をかがめていたリツコは、目の前で少年の色白な手がギクリと握られるのに気がついた。

「——……はい。今ですか——……？……」

ぎごちなく云いながら、男の子は先生の云いつけに従った。

リツコはひとりで2人用の木の机をおこし、給食当番なので廊下へ白衣をとりに行った。

2006年10月21日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

× × ×

清峰 鋭 (えい) がおとなしく先生についてゆくと校長室の隣の応接室へと招じ入れられた。

「失礼します、うちのクラスの生徒がなにか——」

先に立った先生が校長に尋ねる。

「やア、やア、細貝クン。悪い用件ではないようだよ。こちらの御方が清峰クンに話があるというんだ。」

「小ヶ崎 (おがさき) と申します」

校長と向いあった客人が軽く一礼した。

行儀良く、細貝先生と並んでお辞儀をして腰かけて、初めて目を上げて相手をみたとたん——鋭はひどい悪寒を覚えてギュッと目をつぶった。

生徒のそんな様子には気づかないようで、大人3人は型通りの挨拶などを交しあっている。

その男はわりあい小柄で、尊大そうな態度や言葉使いをする反面、ひどく狡猾でいかかわしい雰囲気をもかくし持っているようだ。日に焼けていない黄色い肌に、ひどく分厚い黒ブチ眼鏡をかけて、しきりに唇と舌を突き出すようなしゃべりかたをする。

けれど鋭に、いつかヒルを背中に放りこまれた時のような感じを思いおこさせたのは、どこの町にでもひとりはいそうなその男の陰険さではなかった。

緑色——だと、気がつくまでにはしばらくかかった。その男の着ていた妙なかたちのスーツのことだ。

それはよく見れば自然の葉っぱの色に似せて作ってあるようでいて、やはりまるっきり違った性質をもっているものだった。木々や草の緑があくまでも優しくてしっとり湿っているのにひきかえ、そのスーツの色は毒々しく無味乾燥で、ひどく人為的な感じを与える。

奇妙に目のまわるような形の地模様が織りだしてある。

——先生がたはこのスーツが変なことに気がつかないのかな。

鋭はそっと様子をうかがってみた。2人ともごくあたりまえの顔をしてあたりさわりのない時候の挨拶をとりかわしている。気がついていて礼儀上、表に出さないでいるのとも違うようだ。

コトン。音をたてそうな調子で不意に大人2人は寝入ってしまった。

いつのまにか、男は瞳から妙な圧力を発して鋭を見ていた。鋭はそんな眼つきを以前にも見たことがある。——偶然カエルの群れにいきあたった時の、品定めする、蛇の眼。

「——きみは自分のIQを知っているかね」

ゆっくりと、抑揚の少ないくぐもった声で男は話しはじめた。

「わしは Dr.小ヶ崎。J.E.S.S.——国立科学者養成センターの独立研究者じゃ。ふむ、まあ、教授だと思っというてもらおう。」

その声を聞いているうちにDr. とやらが見かけより歳をとっているらしいことがわかってきた。それに、このまま彼の眼を見つづけてはいけないということも。

鋭は必死になって視線をそらそうとする。どちらかといえば半そで一枚では肌寒いような梅雨の季節なのに、じっとりと額が湿ってくる。体はぴくりとも動かない。

ヘンだな——鋭はいぶかしみ始めていた。催眠術かなにかだろうか？
校長も担任も、すっかり寝入ってしまった。

「J.E.S.S.——わしらは単に《センター》と呼んでおるが——のことはきみも知っておるじゃろう。例の、国立科・技開発研究所の附属機関として一昨年設立されたヤツじゃ。この際、面倒な前置きは抜きにしよう。わしらの計算によればきみのIQは推定260、科学的方面に著しい興味および特性が見られる。……どうじゃね、《センター》へ来ないかね？」

今は小ヶ崎教授の不気味に細められた両眼からは手っ取り早く素直にうんと言わせてしまおうという圧力が放射されていた。

先刻の騒ぎの際に例の“影”からうけたものとはまったく異なる圧迫感だった。“影”のそれがたちば的に相手より弱いものの必死さから来ていたのにひきかえ、今、鋭がうけているのは、「おまえなどわしにかなう筈もないのだ」——という、男の絶対的な自信が裏がえったものだ。

「え、——あの——……」

けれどついに、少年の好奇心が他のすべてに勝ってしまった。

「科学やS・Fがとても好きなのは確かですけど、僕の知能指数がそんなに高いなんてことがどうして解るんです？ それに第一、僕のことをどこで知ったんですか？ 今、先生方が眠ってしまったらっしゃるように見えるのは、これは催眠術かなにかの一種なんですか？ ……だとしたらどうやって——……」

ひとたびアゴを押えつけていた圧力をどこかへやってしまうと、あとは実にスラスラと言葉が口をついて出た。まだ手足の先にはしびれに似た感覚が残っていたがそんなことは何でもない。この、10歳にもならぬ、小柄で大人らしい行儀の良い少年にとって、好奇心——というか向学心、興味を満足させたいという欲求——は唯一、日頃の理性をふっとばさせるシロモノだったのだ。何度注意されても、疑問点をひとつ見つけたとなると次から次へ、得心のゆくまで一時に質問し続ける、という悪癖は一向になおらない。

一度言われたことは二度と注意されずに従がう、この子供にとっては非常に珍しいことである。

((——う。……))

顔にも、声にも、態度には一切あらわさなかったが、小ヶ崎“教授”は内心かなりの衝撃をうけていた。

心理といえばS・Fまがいのパラ・サイコロジー(※)にしか今のところ興味を示していない鋭には知るよしもなかったが、ドクター・オガサキと云えば知る人ぞ知る催眠技術の権威である。その彼の施術を、破るための専門知識はおろか“破る”という自覚をさえ持たずにこの少年は解いて

しまった。……小ヶ崎にしてみればはるか昔の未熟なインターン時代以来はじめての事である。((これは。)) 彼は思った。

一般的にはたで聞こえているほどこの小ヶ崎という男は狭量ではない。それは彼の唯我独尊ともいうべき自尊心がなまかなことでは揺るぎもしないせいでもあったが、むしろ、ちょっとした理由から気に入ってしまったものにはその是非を問わず肩入れをする、半ば以上マッド・サイエンティストじみた身びいきの強さが見られた。老人にありがちな偏執狂の匂があるのである。——もっとも彼は外面的にはさほど歳をとっているとも思えないのだが。

「それは」

コンマ何秒かの沈黙のあと、小ヶ崎は再び自信に満ちて話し始めた。

梅雨どきの薄暗い部屋の中には冷気がこもり、そのせいで小ヶ崎はかなり不快なおもいをして
いるらしかった。

かすかにカビ臭い応接室の雰囲気。窓の外には例の、教授のスーツと同じ色の大型車が見える。

雨はますます激しく、その校舎や大地にぶちあたる轟音は、ともすれば男のしわがれた話し声
をかき消してしまうまでになっていった。……

※ パラ・サイコロジー : 超心理学。

要するに超能力を科学的に解明しようというもの。

『 序章 ・ すべての始まり (3) 』 (@書いたのは中学～高校……だと思
うが……着想自体は小学校3～4年!! ☆)

『 序章 ・ すべての始まり (3) 』 (@書いたのは中学～高校……だと思
うが……着想
自体は小学校3～4年!! ☆)

2006年10月22日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

× × ×

「ここだ、ここだよ、市立『尊臣（とうとおみ）』第2小学校。可能性の最後の1人がいるところだ。」

すっぽりかぶったレインコートのフードで髪を隠して、双子の片われが快活に走って戻って来た。あまり目立たぬようにと、あとの連中は角をまわった植えこみの陰で待っていたのである。

「いま何時？ 12:35か、昼食中だね。この学校ひる休み何分からだろ。」

背の高い黒髪そばかすの少年が防水のデジタル時計をのぞきこむ。

「昼休みはやっぱマズいんじゃない？ 校内はいるのはサ」

「相手の都合もあるだろうし……第一めだつわ。」

そういう彼らにしてからが、登校中であるべき小学生である。

彼ら6人は学校の角の、紫陽花の大株と大株の間の奥まった所に集まっているのだった。アジサイの生け垣は、不思議なことに校庭の鉄柵の外側にあるのだ。

「なんか気に入くないんです、る。この学校、どうも嫌な“気”がよどんでいるみたいですよ。」

柵ごしに校内をのぞきこんでいた、一番小さい子が戻って来てそう報告する。

「なに、おミソ。どういうこと」

年長の勝ち気そうな少女が聞きかえす。“おミソ”と呼ばれた子はモジモジして風がわりなマントのフードをますます深くひきおろす。

「よし。」

リーダーとおぼしき黒髪の少年が云った。

「雨もひどいし、食事して、さっき見た市立図書館で時間つぶそうよ。……放課後まちぶせすればいい」

わーい！ 双児が歓声をあげ、もう1人の男の子がしみじみとつぶやいた。

「助かったァ、ミーちゃんもう毛なみがぐしょぐしょヨオ☆」

女の子が長い髪をなびかせて笑い声をあげる。それほどまでにこの年の梅雨はひどいものなのだ……

leader 黒髪、そばかす → のっぽ (黒ずみ)
twin 金髪ロールヘア マーク・エンゲル・レッドフラッグ
金髪ストレート レーニ・ポリシェ・レッドフラッグ
a girl 黒髪ローレ色白 ゆりや

塔遠見
尊御々

2006年10月23日 連載 (2周目・最終戦争伝説)

× × ×

机を直したりなんだりでいっとう遅くなってしまったリツコは、思い牛乳びんのケースを一人で運び上げなければならなかった。

5時限目は音楽で、音楽室へ移動して音楽の先生の授業だった。6時限目、教室へ戻ってしばらくしてから細貝先生はあらわれなかった。生徒たちがみんなして騒ぎはじめた頃になって5組の楠本先生が来て、4組は自習だから帰ってもいいと云った。

みんないなくなってしまうてもリツコは帰らなかった。楠本先生にきけば何か教えてくれるかもしれなかったが、リツコは男の大人の人はどうも苦手で、話しに行くのが恐いのだった。

あっというまに学級文庫の『世界の名作』シリーズ、残り3巻を読み終ってしまう。はっと気がつくとも外はもう暗く、西の方の雲が少し切れて赤い光がさしこんでいた。雨がやんだのだ。時計を見ると6時45分。とうに門限を過ぎていた。……また食事ヌキだ。

((まァいいや。))

リツコは少し首をかしげて考えた。清峰くんはどうしちゃったって言うのかな。細貝先生だって毎日下校時には、いのこっている生徒を帰すために（たいていの場合リツコ1人だったが、）教室へ見まわりに来るはずなのだ。

((おかしいな。今日はおかしいことばかり。))

首を振ってリツコは教室の中を見わたした。それから校庭を。もう一度室内を。

何がいつもと違うというわけではなかったが、やはり何かが見慣れた世界とは喰いちがってしまっているのだった。それともそれは今までもずっとあったもので、ただリツコが気づかずにいただけかも知れない。

危険、とか不気味、とか云うのではなく、ただ何かしらあやしくて、間違った、あってはいけないような雰囲気ぴったりとあたりをとりまいているのだ。

すぐに真っ暗になってしまったが、別に電気をつけたいとも思わなかった。昔から不思議と暗闇を恐がらない子供だったのだ。お腹がすいたけれどそれも慣れていた。清峰くんの席から上着と（鋭はいつでも非常に準備の良い子だ。）枕がわりにザブトンを借りると、リツコは机の上につっぷしてそのまま寝入ってしまった。

翌朝、朝一番の光で目が覚めると5時10分前だった。そうすると清峰くんも先生もついに戻ってこなかったらしい。戻って来てもしリツコを見つければ、先生なら大慌てで送って行ってくれるだろうし清峰くんなら自分の所へ泊めてくれるだろう。リツコはあくびをし、寝ちがえてしまった首をぐるぐるまわした。

どうりで一晩中風の音がうるさいように感じたわけで、窓の外はすっかり晴れてしまっていた。よい天気だ。

((夏が来たのね.....))

なんとはなし そんな風を感じながら清峰クンの荷物と自分のとをまとめ——今日はもう学校へは戻って来ないつもりだった。それどころではない気がするの。——ザブトンをもとにかえし、上着は羽織ったままリツコはそっと学校を出た。校門はもちろん3ヶ所とも閉まっているが、鉄柵が子供1人抜けられるくらいの幅で壊れている所を知っていたのだ。

一旦ある場所へ寄って隠してあるお財布を持ちだしてき、一軒だけ開いていた牛乳販売店でパンと牛乳を買う。おばさんになんだという顔をされたけれど別に気にもとめなかった。

公園で朝食を済ませる。午前5時31分。

それからリツコはてくてくと街はずれへ向って歩きはじめた。

濡れたまんまのバス停のベンチで始発の時間を待つよりも、リツコはこの道をのんびり歩いてゆくのが好きだった。

朝まだきの白っぽく明るい光のなか、まだ古びていない舗装道路の両脇に新旧とりまぜて小ぎれいな住宅街。朝もや、朝露、なごりの雨滴に虹の色どりをそえられて、紫陽花、緑樹、バラの花などが歩道にのりださんばかりに生き生きと息づいている。

駅前広場へ通じる国道との交差点を通りすぎて、右へ左へゆるくカーブをえがきながら道は続いてゆく。市街地を外れ果樹林とわずかばかりの段々畑を抜け、となり町との境にあるゆるやかにうねるような山地にさしかかるあたり、リツコの道はバス道路からそれて美しい林のなかへわけ入っていった。

鳥の音がする、葉ずれの音がする。ひいやりと心持ちうす暗く涼しい木立ちのなか、雨続きで表土をすっかりはぎとられた黄土色の小径が、山頂へと登っている。車のわたちの跡が小川になっている。

澄んだ黄金色の光が雑木林の中へとさしこみ始めていた。少女の行く手で紗幕——とばり——をひくかのように朝の白い化粧着（ガウン）が姿を消してゆく。

鳥の音がする。蝶がとんでゆく。

みどりの空気のなか

すでに小一時間ほども歩いていたがリツコは一向に疲れた様子を見せなかった。むしろ小気味よく息をはずませ、頬を紅潮させて急勾配の坂をはずむように登ってゆく。山頂が近い。特に枝の繁ったやぶのわきを抜けると目的の場所が見おろせた。清峰鋭のいる、聖光愛育園。キリスト教系の私設孤児院である。自然に足が速くなる。

と、その時、眼下の溪流の勢いのよい響きにまじって、どこかすぐ近くから人の話し声めいたものが聞こえてきた。

((え、))

リツコが足を止めるのと、

「ほお～～～、ほけきよ！」

間の抜けた鳴きマネと共にヒョロツとした男の子が道の真ん中に飛び出して来るのが、ほとんど同時だった。

ふみァお～～～!! 男の子は今度はネコのまねをした。ウグイスに比べればはるかに堂に入っていて、身振りも加えて警戒する時の猫の感じが実によく出ている。

ヒョロツとして見えると云ってもそれはむしろ痩せているせいで、実際にはそう背が高いわけでもなく、歳も、せいぜい2つか3つリツコより上というぐらいのようだった。リツコは安心して、少し微笑った。

「なんだなんだ」

「なによ、へったくそな合い図ね」

男の子が飛び出して来た（正確には斜め上くらいの木の枝から飛び降りて来たのだったが）側のやぶ陰から、さらに何人かの子供たちがドヤドヤとかけ出して来た。

「どうした、登校時間にはまだ早いだろ。それとももう——」

しんがりになった背の高い男の子が、リツコを見つけてひどく慌てた顔をした。「誰だい、その子」

「ミーちゃんが知ってるワケがないんだもんネ」

「どっちから来たのよ」

「逆ホーコー」

「みはりィ～～～、発見が遅いじゃないか！」

まあまあよ、とか云って背の高い大人っぽい男の子を中心にワヤワヤと何やら相談し始めるのを、リツコはキョトンとした面持ちで傍観していた。

彼ら6人の子供たちは、議題にされている少女には知るべくもないが、昨日小学校脇のアジサイの陰に集まっていた例の連中である。

「きみ、名前は？」

すぐに意見はまとまったらしく、6人はリツコの方へ振りかえった。

((あの、……))

「ダメよオ！ 礼儀しらず。」

リツコがあいまいに笑ってすぐには答えないのを見て、すらりとした体つきのカッコ良い女の子が質問した子を叱りとばす。

「ヒトに名前きく時はまず先に自己しよーかいするもんだって学校で習ったでしよーが。」

それから、

「あのね、あたし、ゆりや。こっちのコが“ノッポ”ってってあたし達（ら）の班のリーダーなんだ。で、そっちが“ふたご”のマークとレーニ。後ろにいるのが、ミーとおミソ。あたしたち、ちょっとワケがあって、あそこの——（と、あいまいに手を振って聖光愛育園の赤い屋根を示し、）——キヨミネ、って子が登校するのを待ち伏せしてるんだ」

[『 序章 ・ すべての始まり \(5\) 』 \(@1982.07.06.\)](#)

2006年10月24日 [連載 \(2周目・最終戦争伝説\)](#)

× × ×

その日の午後と夜と次の日の午前中いっぱい、囚人護送車のような造りのその大型自動車は休みなく走り続けた。鋭は頑丈な後部荷台その間中ひとりで乗せられていた。

ひとりぼっちが淋しくて怖い、などという殊勝な子供では最初っからなかったし、本を持ちこんでいたので退屈もしなかったけれど、夜も毛布一枚でそこに寝かされたのには閉口した。なにしろ走り続ける自動車の中の、固くて狭い作りつけのベンチの上だったのだ。揺れは比較的少なかったとはいえ夜中に確実に2回はころがり落ちた。

結局、目がさめてみると床の上にじかに寝ていた。

いつかの夏休みに川原にテントを張った時のことを思い出す。

「う～～～……」

食事はさし入れられたトイレには2時間おきの小休止があった。

けれど、歯ミガキも着替えも洗顔もなしだったのでひどく不潔な気がして具合が悪かった。風邪をひいてしまったようでもあった。

「着いたぞ。」

朝食からだいぶんたってそろそろまた空腹を感じだしていた頃、車が停ったと思うとヘンにピカピカする緑色の制服を着た男たちが鋭をおろしに来た。緑の服——小ヶ崎教授の奇妙な背広と同じ、人工的でよくよく見るうちに背中が粟だってきてしまいそうなヤツである。ただ地紋はなく、織ってあるものなのにまるでビニール布のようなテラテラした光沢。

「独立研究者（ドクター）・小ヶ崎は他に急用ができたのでこのまま外部に出向かれる。おまえは正面に見えるあの白い4階建ての棟に行くように。連絡は既についている。これが通行証だ。

ゲートでこれを見せればすぐに迎えの者が出るよう手筈がついている。では。」

他の2人より階級が上であるらしい制服の男が、口早にそれだけ云ってまたすぐ運転台に戻った。

「あ・ありが——……」

鋭が礼を云う暇もなく、残り2名の隊員をも乗せて、制服や背広と同じ緑色をした車は走り去って行った。

リツコがいれば その車が昨日校庭に乗り入れてきたあの大型車と同じものだと すぐに気がついたことだろう。

ともあれ、何が起こったのか、何が起ころうとしているのか……？

そんな事柄にはまったく気づかぬげに、鋭は、教えられた白い建物へと素直に歩きはじめた。

ときに19××年6月末日。気象庁は例年より幾分早く、激しかった今年の梅雨がすでにあけたこと

を宣言した。

リステラス星圏史略
古資料ファイル
3-3-2-1
「清瀬律子の物語」

<http://p.booklog.jp/book/109779>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109779>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109779>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ